

かしい思い出です。

このように低温科学研究所に在籍中、スタッフ・事務の方々、そして多くの院生の方々と、実験手法や研究方法についていろいろ議論し、アドバイスを受けたことは、上記の研究を進める上で大変有意義で、現在でも役に立っています。

大学院修了後、国立極地研究所での「ドーム Fuji 一次解析」「air-hydrate の核生成」、九州大学大学院総合理工学研究院での「Si 清浄表面における原子レベルでの表面再配列構造の形成過程」、産業技術総合研究所北海道センターでの「ガスハイドレート結晶の成長機構」など、純粋な氷の物性研究からは遠ざかっていましたが、2 年前より富山大学理学部地球科学科に移り、再び水物性の研究ができる環境になりました。平田賞は「これ

からの活躍が期待される」ことが受賞対象と伺っております。これからもさまざまな謎に、学生と共に取り組んでいきたいと考えています。

## 文 献

- Arakawa, K. and Higuchi, K., 1952: Studies on the Freezing of Water (I), J. Faculty of Science Hokkaido Univ. Ser II, **4**, 201-208.
- Langer, J. S. and Müller-Krumbhaar, H., 1977: Stability Effects in Dendritic Crystall Growth, J. Crystal Growth, **42**, 11-14.
- Tirmizi, S. H. and Gill, W. N., 1989: Experimental Investigation of the Dynamics of spontaneous Pattern Formation During Dendritic Ice Crystal Growth, J. Crystal Growth, **96**, 277-292.

## 論文賞を受賞して

独立行政法人土木研究所寒地土木研究所 松下 拓樹



この度は、思いがけず論文賞を頂き、大変驚くとともに光栄に思います。論文賞に推薦していただいた方をはじめ、学会関係者の方々、雪氷学会員の皆様に心より御礼申し上げます。

受賞対象となった論文「着雪を生じる降水の気候学的特徴」は、湿型着雪の発生条件について地上気温と相対湿度を指標に表現し、この発生条件に基づいて日本における湿型着雪発生 of 気候学的な地域性を明らかにしたものです。

私と着雪との本格的な関わりは、今から十数年前にコンサルタントとして社会に出てからでした。着雪現象は、樹木や電線等の対象物によってその振る舞いが異なります。これまでの着雪に関する地域分布は、突発的で局地的な災害事例などに基づいたものが多く、これを気象学的観点から客観的な指標を用いてより広域な地域特性を表現できないか、と考えたのが始まりでした。また、

湿型着雪の発生気象条件に気温が用いられますが、降雪粒子の融解現象を伴う湿型着雪に対し、気温だけで発生条件を表現することに違和感を持ったことが種になりました。

そう思いながらも、着雪は非常に複雑な現象であり、具体的な発想はなかなか生まれませんでした。転機は、社会人として千葉大学大学院に在籍したときでした。西尾文彦先生の指導の下、着水性の降水と雨水現象をテーマに学位取得に挑戦していました。このとき着水性降水の発生条件の検討に降水粒子と大気との熱収支計算を行いました。これを湿型着雪に応用できないかと考えました。論文では既往研究の観測および計算結果に基づいて、地上気温と相対湿度を指標にした発生条件を示すことができました。

次に、この湿型着雪の発生条件をどのように客観的に検証するのが問題でした。着雪に関する

継続的で広域な観測資料は皆無です。そこで、全国の気象官署で行っている観測原簿資料の記事のうち「着雪により風の欠測」等の記載に着目しました。有人である気象官署は測器のメンテナンスが行き届いており、多少の軽微な着雪であれば欠測はしないはず、欠測するのであれば純粋に付着しやすい降雪事例であろうと考えました。この欠測事例と前述の発生条件をプロットしてみると、見事に当てはまりました。ここで学会で発表することを考えました。

当初、論文としてまとめることは全く考えていなかったのですが、次の二つのきっかけで投稿することを決めました。まず一つは、2005 年の全国大会でポスター発表したところ意外と好評で、「予稿では引用できないから、早く論文としてまとめなさい」といった大変嬉しいコメントも頂き、大変励みになったことです。学会発表と雪工学分科会の着氷雪研究会で、熱心な議論をしていただいた多くの方々に感謝申し上げます。もう一つは、ポスター発表の翌年の「雪氷」に「着氷雪特集号」が企画されていたことで、編集担当委員の水津さんの次の言葉に勇気付けられたからでした。「私は、まとまっていなかった研究を「雪崩特集号」が出版されるというので、急いで何とかまとめて発表したことがあります。その機会がな

ければ、論文としてまとめることをせずに終わってしまったかも知れず、後で、特集号がいい機会になったと感じました。つばみを花として咲かしてください。」まさにその通りになりました！

投稿後は、査読者の方々からの丁寧な意見、適切なご指摘が、未熟な初稿を論文として掲載可能な状態に持ち上げるのに大変参考になりました。深く感謝申し上げます。また、この論文は自分の観測結果ではなく、先達の研究成果と観測資料の上に成り立っています。特に、論文の文献欄に記載した方々と、気象官署で観測に携わった多くの関係者の方々の観測継続に対する努力と熱意に敬意を表したいと思います。

この論文のもう一つの思い出は、改稿作業中に東京から札幌へ引っ越して転職したことです。荷解き前の段ボールにパソコンを置いて作業をするなど、論文作成に家庭で過ごす時間を費やしました。家族には心から感謝いたします。また同じような境遇で論文を書いている方々の励みに少しでもなれば幸いです。

最後にこれまでお世話になった方々に、もう一度深く感謝申し上げますとともに、これからも御指導と御鞭撻を賜るようお願いして、受賞の御礼の言葉とさせていただきます。本当にありがとうございました。

## 論文賞を受賞して

株式会社富士通ソフトウェアテクノロジーズ 鈴木 亮平



このたびは、素晴らしい賞をいただきまして、誠にありがとうございました。新社会人となって大学から離れると同時に、雪氷の世界からも遠ざかりかけていた頃、思いがけずこのような立派な賞をいただき大変嬉しく思います。論文賞の推薦から授与に至るまで、お時間を割いて下さった学会関係者の方々に感謝いたします。

今回、受賞の対象となった論文「ASTER データによって得られたヒマラヤのデブリ氷河上の熱特性空間分布」は、名古屋大学大学院の博士論文(2007 年)の主題として執筆しました。雪氷圏研究グループでは修士課程からお世話になり、海外での長期にわたる観測や学会発表など、氷河研究を通じて貴重な経験を積ませていただきました。